現存最古の『系譜集成』写本：サンクトペテルブルグ東洋写本研究所 C 372写本に関する覚書

大塚　修

はじめに

東洋文庫ライブラリには、サンクトペテルブルグ・ロシア科学アカデミー東洋写本研究所（旧東洋学研究所）(1)が誇るアラビア語・ペルシア語・トルコ語写本コレクションから撮影されたマイクロフィルムが所蔵されている(2)。残念ながらこのマイクロフィルムコレクションの目録は刊行されておらず、東洋文庫の蔵書検索サイトから検索することもできない。本稿執筆時点では、閲覧室備え付けの仮目録『東洋文庫収集サンクトペテルブルグ所蔵敦煌等文献マイクロフィルム仮目録』を参照する以外にその全容を知る術はなく、その存在すら我が国の研究者に十分に周知されていない状況にある。このような状況に鑑み、本稿では、その中から１つのペルシア語写本を紹介することで、このコレクションの存在と価値を学界に広く知らしめることを目的とする。今回紹介するのは、イルハーン朝（1256-1335年頃）に仕えた歴史家・頌詩詩人シャバーンカーライー Muḥammad b. ʻAlī b. Muḥammad b Ḥusayn b. Abū Bakr Shabānkāra'ī（693／1293/4年-）著『系譜集成 *Majmaʻ al-Ansāb*』の写本（St. Petersburg, Institute of Oriental Manuscripts, MS. C372）(3)である。

１．『系譜集成』研究の現状

『系譜集成』は、イルハーン朝９代君主アブー・サイード（在位1316-1335年）の治世までを扱った簡潔なペルシア語普遍史書で、19世紀以来その存在自体は学界に広く知られてきた。しかし、ペルシア文学史研究

の碩学ブラウン E. G. Browne が『ペルシア文学史』（初刊1920年）において「マイナーな歴史書」と評価したように（Browne 1951: 103）、この作品に対する研究者の評価は決して高いものではなかった[4]。日本語による唯一の網羅的ペルシア語文献解説（本田1984: 618-662）においては、その書名すら挙げられていない[5]。これらの評価が影響したためか、校訂本は長らく出版されることはなかった。

その一方で、『系譜集成』に収録されたガズナ朝（977-1186年）に関する記事だけは研究者の関心をひきつけてきた。その記事とは、初代君主サブクティキーン（在位977-979年）が息子マフムードのために書いた『忠告の書 *Pand-nāma*』からの引用記事で、これ以前の文献には見られない独自の情報を伝えている[6]。この情報に注目したナズィーム M. Naẓīm は、1933年に当該部分の翻刻と英訳を刊行した（Naẓīm 1933）[7]。この部分に関しては、その後、メルチル E. Merçil による校訂とトルコ語訳も刊行されている（Merçil 1975）[8]。ガズナ朝史以外では、シャバーンカーラ、ファールス、フルムズ、ルリスターン、といったイラン高原南部に建設された地方王朝の歴史に史料的価値が認められてきた（Bosworth & Jackson 1997: 158b）。フルムズの地方政権の歴史[9]はオバン J. Aubin の手で校訂されている（Aubin 1953: 129-137）[10]。オバンはその後、当時参照し得た写本を網羅的に分析した文献学的研究を著したが、これも作品全体を対象としたものではなかった（Aubin 1981）。

このような状況下で、1363／1984/5年（後半部、*Majmaʿ/1363*）と1381／2002/3年（前半部、*Majmaʿ/1381*）の 2 回に分けて校訂本が出版され、ついに作品の全貌が明らかとなった。ところが、校訂者モハッデス M. H. Muḥaddith は、『系譜集成』の諸写本に関する文献学的考察を行わず、「たまたま」手元にあった写本に基づいて校訂作業を行ってしまった。そのため、現行の校訂本には幾つかの問題点が認められる。

本稿では、先行研究で十分に行われてこなかった『系譜集成』の諸写本に関する文献学的考察を行う。その上で、東洋写本研究所 C 372写本の諸写本の中における位置付けを明らかにし、この写本こそがモハッデスが校訂作業を行う上で底本にすべき写本であった点を指摘したい。

2．『系譜集成』刊本の問題点

校訂者序文によれば、モハッデスが『系譜集成』を校訂する際に利用したのは次の5写本である。

1．Tehran, University Library, MS. 5838
2．London, British Library, MS. Add. 16696
3．Paris, National Library, MS. Suppl. persan 1278
4．Tehran, Malek Library, MS. 6181
5．Istanbul, Süleymaniye Library, MS. Yeni Cami 909

モハッデスは、①書写年代が一番古い点（15世紀と推定）、②情報量が多い点（他の写本の3～3.5倍）、③正確に丁寧に書写され、続編を有している点の3点に鑑み、イスタンブル写本をより原本に近い写本だと考え、底本とした。その上で、残りの4写本、および『世界征服者の歴史 *Tārīkh-i Jahān-gushāy*』、『モンゴル史 *Tārīkh-i Mughūl*』(11)、『スィースターン史 *Tārīkh-i Sīstān*』、『選史 *Tārīkh-i Guzīda*』、『ヤミーニー史 *Tārīkh-i Yamīni*』、『歴史の飾り *Zayn al-Akhbār*』、『集史続編 *Dhayl-i Jāmi' al-Tawārīkh*』、『胸臆の安息 *Rāḥat al-Ṣudūr*』といった作品も参照している（Muḥaddith 1363: 12-16）(12)。ただし現行刊本においては写本間のテクストの異同が一切示されていないため、実際にどのような校訂作業が行われたのかについては確認することはできない。

モハッデスは自身が参照した5つの写本の中から底本を定めたわけだが、そもそもこれら5つの写本を選定した基準は何だったのだろうか。彼が最初に校訂本を刊行したのは1363／1984/5年であったが、それ以前に刊行されたブレーゲル Yu. E. Bregel のペルシア語文献目録(13)では、16点の写本が紹介されている（Bregel 1972: 334-337）(14)。そこでは、モハッデスが底本とした写本よりも古い書写年代だと推定される写本が2点も挙げられている（詳しくは後述）。モハッデスはロシア語で著されたブレーゲルの文献目録のペルシア語訳を参照しており（Āriyan-pūr, Īzadī & Kishāwarz 1362: 492-494）、これらの写本の存在について情報を得ていたはずである。それにもかかわらず、その存在にすら言及していない。実は、現行刊本で紹介されている5つの写本というのは、綿密

な史料調査に基づいて選ばれたものではなく、当時モハッデスが「たまたま」テヘランで参照できたものにすぎないのである[15]。したがって、まずはモハッデスが利用した5写本が、現存する『系譜集成』諸写本の中にどのように位置付けられるのか、を考察する必要があるだろう。

3．現存『系譜集成』諸写本

現在、『系譜集成』の写本は何点残っているのだろうか。ブレーゲルが紹介した『系譜集成』の写本は16点であったが、筆者による写本調査の結果、少なくとも25点の写本が現存していることが明らかになっている。最初にその一覧を提示したい[16]。なお写本系統の分類は暫定的なもので、今後変更を加える可能性もある[17]。

A系統写本（『系譜集成続編』付）

1．St. Petersburg, Institute of Oriental Manuscripts, MS. C372（Miklukho-Maklai 1975: 66-71, 73-75）：14世紀、28.5 x 18cm（22.3 x 13.5cm）、25行、249葉、著者直筆本？

2．St. Petersburg, Institute of Oriental Manuscripts, MS. C1096（Miklukho-Maklai 1975: 72-73, 75-76）：15世紀、24.5 x 16cm（17.5 x 11 cm）、21行、341葉、C372写本からの書写？

3．Istanbul, Süleymaniye Library, MS. Yeni Cami 909（Tauer 1931: 95-96）：15世紀、25 x 17cm（16 x 11cm）、21行、285葉

4．Tehran, Majlis Library, MS. 14325（Ṣadrā'ī Khu'ī 1377: 454）*：書写年不明、30 x 20cm、19行、269葉

B系統写本

5．Paris, National Library, MS. Suppl. persan 1278（Blochet 1905: 208）：17世紀、25 x 17cm（19.5 x 11.5cm）、315葉

6．Dushanbe, Academy of Sciences, MS. 1788/1（Mirzoev & Boldyrev 1960: 139-140）：1035年ムハッラム月1日／1625年10月3日、26 x 20cm（19.5 x 13.5cm）、23行、285葉、写字生 Ibn Mīrzā Shāhim b. Qalāwul Bukāwul b. Qul Muḥammad Bī b. Muḥammad ‘Alī b. Zayn al-Bek b. Murtaḍā Bek al-Khwārazmī

C系統写本

7. Tehran, Malik Library, MS. 6181 (Afshār & Dānish-pazhūh 1364: 729)：16世紀、21.6 x 13cm、21行、131葉

8. London, British Library, MS. Add. 16696 (Rieu 1879: 83-84)：16世紀、22.6 x 12.5cm (15.5 x 7.5cm)、19行、134葉

9. Rampur, Raza Library, MS. F1824 (Khwāja Pīrī 1996: 566)*：1008年ラジャブ月／1600年、22 x 13cm (16 x 8cm)、19行、123葉

10. London, British Library, MS. I. O. Islamic 827 (Ethé 1903: 11)：1027年ラジャブ月14日／1618年7月7日、21.5 x 13cm (15.7 x 10.2cm)、15-17行、133葉

11. Cambridge, Cambridge University Library, MS. Or. 1338(10) (Arberry 1952: 26)*：1046年第1ラビー月18日／1636年8月20日、25.5 x 16.5cm (19 x 11cm)、18行、98葉、写字生 Darwīsh Muḥammad

12. Tehran, University Library, MS. 5838 (Dānish-pazhūh 1357: 103-104)*：1067年ズー・アルヒッジャ月25日／1657年10月4日、20 x 12cm (13 x 7cm)、15行、174葉

13. Manchester, John Rylands Library, MS. Pers. 791 (Kerney 1898: 190)：1080年ラマダーン月17日／1670年2月8日、21.1 x 14.7cm (16.5 x 8.5cm)、15行、149葉、写字生 Muḥammad Afḍal

14. Cambridge, Cambridge University Library, MS. Add. 1088(8) (Browne 1900: 195)：17-18世紀?、20 x 12cm (15.5 x 7.5cm)、25行、69葉

15. Oxford, Bodleian Library, MS. Ouseley 15/2 (Ethé 1889: 20-21): 17-18世紀?、20 x 14cm (14.5 x 10cm)、11行、155葉 (fols. 74b-228b)

16. London, British Library, MS. Or. 1755/13 (Rieu 1883: 1019a-1020b)：1850年頃、23 x 13.5cm (15.5 x 8cm)、11行、17葉 (fols. 587b-603b)、抜粋

17. London, Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, MS. Pers. 28 (Morley 1854: 28-30)：書写年不明、23 x 15.5cm (17 x 10.5cm)、15行、145葉

18. London, British Library, MS. I. O. Islamic 2385 (Ethé 1903: 10-11)：

書写年不明（遅い時期）、21.5 x 14cm（18 x 9.5cm）、17行、127葉

未調査写本

19. Tehran, Sulṭān al-Qurrā'ī Library, MS. 43384（Munzawī n. d.: 4189-90）*：14-15世紀、23行、247葉、詳細不明

20. Tehran, Sulṭān al-Qurrā'ī Library, MS. 43385（Munzawī n. d.: 4190）*：15-16世紀、詳細不明[18]

21. Tabriz, Ḥusayn Nakhjiwānī Library, MS. 44（Afshār & Dānish-pazhūh 1344: 340）：16世紀、詳細不明[19]

22. Karachi, National Museum, MS. N. M. 1957-947/7-2（Nawshāhī 1983: 696）*：1108／1696/7年、23.5 x 14cm（17.5 x 8.5cm）、17行、146葉（fols. 302b-447b）[20]

23. Kolkata, The Asiatic Society Library, MS. PSC7（Ivanow 1985: 3）：17世紀、25.5 x 15cm（17.5 x 9.5cm）、15行、145葉

24. Tonk, Arabic and Persian Research Institute, MS. Udaipur 2631（Ali Khan 1987: 5-6）*：20世紀、31 x 20cm、15行、127葉

25. Tonk, Arabic and Persian Research Institute, MS. Purchase 3869（Abdul Moid Khan 1996: 278）*：書写年不明、22 x 14cm、13行、189葉

モハッデスが指摘しているように、『系譜集成』の諸写本は、情報量の多寡で大きく二つの系統に分類可能である。写本１～６の分量は250～350葉前後であるのに対し、写本７～18の分量は150葉前後で、中には100葉にも満たない写本もある。『系譜集成』の写本系統の分類については、『イスラーム百科 *The Encyclopaedia of Islam*』では次のように説明されている（本稿における引用文中の鍵括弧は筆者による補足、下線は筆者による強調を示している。また、引用文中に見られる祈願文は省略した）。

> イルハーン朝君主アブー・サイードのワズィール、ギヤース・アッディーン・ムハンマド・ブン・ラシード・アッディーンに献呈された（『系譜集成』の）初版本は、733／1332/3年に作成されたが、736／1336年にワズィールの邸宅が破壊された際に失われた。シャバーンカーライーは738年第１ジュマーダー月22日／1337年12月17日に

1332/3年	初版本作成	散逸
1337年	第 2 版作成	イスタンブル写本 Yeni Cami 909（A系統写本に相当）
1343年	第 3 版作成	パリ写本 Suppl. persan 1278（B系統写本に相当）
1343年以降	第 3 版の要約作成	ロンドン写本 Add. 16696（C系統写本に相当）

表１.『イスラーム百科』における『系譜集成』写本の分類

第 2 版を完成させた。この版（の内容）は最良の写本であるイスタンブル写本 Yeni Cami 909と刊本の中で確認することができる。さらに、チョパン朝君主ピール・フサインに献呈され、743／1343年に完成した第 3 版は、パリ写本 Suppl. persan 1278とタブリーズ写本に代表されている。幾つかの写本（例えば、英国図書館 Add. 16696）に見られる、第 3 版の要約はおそらく、相当遅い時期に作られたのだろう。というのも、10／16世紀以前の写本は存在しないからである。(Bosworth & Jackson 1997: 158b)

『イスラーム百科』では、現存する『系譜集成』の写本は 3 系統に分類され（表１）、その中で、イスタンブル写本が伝えるのは現存する最も古い第 2 版の内容だとされる。そして、モハッデス同様、イスタンブル写本を最良の写本だと評価している。ここでも、ブレーゲルの文献目録に明記されている現存最古のサンクトペテルブルグ東洋写本研究所Ｃ372写本の存在は無視されてしまっている。以降、西欧やイランの研究者に注目されることのなかったＣ372写本の紹介を通じて、現行刊本の問題点を指摘したい。

４．サンクトペテルブルグ東洋写本研究所Ｃ372写本

４－１．Ｃ372写本の特徴

葉数249葉、紙の大きさ28.5 x 18cm、書写面の大きさ 22.3 x 13.5cm（赤い二重の枠線に囲まれている）、１頁あたりの行数25行、となっており、テクストはナスフ体の書体で書かれている（画像１～３）。写字生

の名前、書写年、書写地は未記載。東洋写本研究所の目録では、書写年は14世紀（783／1381/2年以降）、書写地はイランと推定されている。また、著者直筆の写本である可能性が指摘されている（Miklukho-Maklai 1975: 75）。C 372写本がシャバーンカーライーの直筆本である可能性については、ザーレマン C. Salemann がこの写本を紹介して以来（Salemann 1894: 288）、ロシア語圏の研究者の間ではたびたび指摘されてきた[21]。もしこの仮説が正しいのならば、現行刊本の底本となったイスタンブル写本が現存する最古最良の写本であるというこれまでの評価は根底から覆ることになる。

４－２．C 372写本は著者直筆本か？

C 372写本が著者直筆本であるか否かについて、明確な根拠を提示して説明しているのは、ムギノフ A. M. Muginov ただ一人である（Muginov 1954: 223-224）。彼が指摘する第一の根拠は、フルムズの地方政権の章の最後に記された著者による次の一文である。

> 本書の執筆は、この集成 īn majmū‘a の著者、〈ムハンマド・ブン・アリー・ブン・アッシャイフ〉[22]のか弱き惨めな手により、預言者ムハンマドのヒジュラから738年目の第１ジュマーダー月22日に終わった。唯一神である神に称賛あれ。（*Majma‘*/C372: 205b）

続く第二の根拠は、ガズナ朝史の項目に見られる。151a～151b葉の文章中には7行にわたって文字の上に横線が引かれている箇所がある。ムギノフによれば、これは著者自身による訂正線だという。ちなみに、C 372写本から書写されたと考えられる、同じく東洋写本研究所に所蔵されるC 1096写本では訂正箇所はきれいに削除されている。

筆者はムギノフが提示する根拠だけでは、C 372写本を著者直筆本とする十分な根拠にはならないと考えている。第一の根拠の738年第1ジュマーダー月22日／1337年12月16日に著者自身が書き上げたという記事自体は、著者の手によるものであろうが[23]、それは必ずしも直筆であることを意味しない。後世の写字生がこの部分をそのまま書き写したとい

う可能性も考えられるからである。また、第二の根拠の訂正線についても、訂正線を引くことができたのは何も著者本人だけではない。後世の読者が他の写本にはないからと訂正線を引くこともあっただろうし、写字生が書写した際に訂正を施すこともあっただろう(24)。

Ｃ372写本が著者直筆本であるかどうかという問題には、これ以上立ち入らないが(25)、Ｃ372写本が現行刊本の底本となったイスタンブル写本よりも書写年代が古いという点は間違いないだろう。所蔵印や書き込みなどの書写年代を推定するための材料は残されていないものの、紙質や書体（ナスフ体）から判断する限り、書写年代を14世紀とする先行研究の評価は適切であるように思われる。また、上述の著者による執筆記録、訂正線が引かれた文章はイスタンブル写本には存在しない（*Majma'/1363*: 219, 58）。もともと著者によって書かれていた執筆記録が保存されていないことからも、イスタンブル写本はＣ372写本に比べて原本から遠い世代の写本だと判断できるのである。

４－３．現行刊本の問題点

以上、モハッデスが底本としたイスタンブル写本は、Ｃ372写本よりも後世に書写された写本で、原本から遠い世代の写本であることを明らかにしてきた。それでも、写本の保存状態などからイスタンブル写本の方が優れている写本である可能性も捨てきれない。そこで、Ｃ372写本と、イスタンブル写本に基づく現行刊本の内容を比較することにより、どちらの写本の方がより正確にテクストの内容を保存しているのか、という点について検討したい。（表２）では、現行刊本に対応するＣ372写本の葉数を示している。

一見して明らかなように、両者の構成・内容は完全に一致する。また、テクスト間の異同もさほど多くはない。ただし、注意深く比較対照してみると、現行刊本には幾つかの問題があることが明らかとなる。その中でも特に問題のある箇所を紹介したい。それは、現行刊本の序文の最後に位置する記述である。

さあ、次のことを知りなさい。アダムの時代から733年ムハッラム

内容	現行刊本	C 372写本
『系譜集成』第 2 版序文(26)	*Majma'/1381*: 13-20	1b-3b
『系譜集成』初版序文	*Majma'/1381*: 20-33	4b-9a
博物誌	*Majma'/1381*: 35-61	9a-17b
本文冒頭 āghāz-i kitāb-i Majma' al-Ansāb	*Majma'/1381*: 61、後半部欠	17b-18a
目次 fihrist al-ansāb	前半部欠、*Majma'/1381*: 61-62	18a-24b
預言者	*Majma'/1381*: 66-194	25b-67a
1 部 1 章 1 節：セツ一族	*Majma'/1381*: 195-196	67b
1 部 1 章 2 節：カユーマルス一族	*Majma'/1381*: 196-198	68a-68b
1 部 1 章 3 節：アード一族	*Majma'/1381*: 199-202	68b-69b
1 部 1 章 4 節：ファリードゥーン一族	*Majma'/1381*: 202-205	69b-71a
1 部 2 章 1 節：カヤーン一族	*Majma'/1381*: 205-207	71a-71b
1 部 2 章 2 節：ラフラースブ一族	*Majma'/1381*: 207-212	71b-73a
2 部 1 章 1 節：諸地方政権	*Majma'/1381*: 212-213	73a-73b
2 部 1 章 2 節：ギリシア諸王	*Majma'/1381*: 213-214	73b
2 部 1 章 3 節：ローマ諸王	*Majma'/1381*: 214-215	73b-74a
2 部 1 章 4 節 1 項：アラブ諸王	*Majma'/1381*: 216-221	74a-76a
2 部 1 章 4 節 2 項：イエメン諸王	*Majma'/1381*: 221-229	76a-78b
2 部 1 章 5 節：アシュカーン朝	*Majma'/1381*: 229-230	78b-79a
2 部 2 章 1 節 1 項：サーサーン朝	*Majma'/1381*: 230-243	79a-83b
2 部 2 章 1 節 2 項：諸皇帝（アヌーシルワーン～）	*Majma'/1381*: 243-255	83b-87b
2 部 2 章 2 節 1 項：正統カリフ	*Majma'/1381*: 255-316	88a-110a
2 部 2 章 2 節 2 項：ウマイヤ朝	*Majma'/1381*: 316-330	110a-115a
2 部 2 章 2 節 3 項：アッバース朝	*Majma'/1381*: 330-402	115a-138a
2 部 3 章 1 節：サッファール朝	*Majma'/1363*: 19-22	138a-139b
2 部 3 章 2 節：サーマーン朝	*Majma'/1363*: 23-28	139b-141a
2 部 3 章 3 節：ガズナ朝	*Majma'/1363*: 29-88	141a-162a
2 部 3 章 4 節：ブワイフ朝	*Majma'/1363*: 89-95	162a-164a
2 部 3 章 5 節：セルジューク朝	*Majma'/1363*: 96-121	164a-173a
2 部 3 章 6 節：グール朝	*Majma'/1363*: 122-124	173a-173b

２部３章７節：イスマーイール派	*Majma'/1363*: 125-133	174a-177a
２部３章８節：ホラズムシャー朝	*Majma'/1363*: 134-148	177a-182a
２部４章２節１項：シャバーンカーラの地方政権	*Majma'/1363*: 149-181	182b-193a
２部４章２節２項：ファールスの地方政権	*Majma'/1363*: 182-187	193b-195a
２部４章２節３項：キルマーンの地方政権	*Majma'/1363*: 188-205	195a-200b
２部４章２節４項：シャームの地方政権	*Majma'/1363*: 206-209	200b-201b
２部４章２節５項：ヤズドの地方政権	*Majma'/1363*: 210-214	202b-204a
２部４章２節６項：フルムズの地方政権	*Majma'/1363*: 215-219	204a-205b
２部４章１節１項：カーアーンの一族	*Majma'/1363*: 220-259	206a-218b
２部４章１節２項：イルハーン朝	*Majma'/1363*: 260-335	218b-247a
『系譜集成続編』	*Majma'/1363*: 339-349	247a-249b

表２．『系譜集成』の構成

> 月である今日に至るまで（の時の長さ）を簡単に説明しましょう。世界の諸々の暦では、沢山の伝承があり、幾つもの説が唱えられている。ユダヤ教徒の伝承、キリスト教徒の伝承、ゾロアスター教徒の伝承、ウラマー aymma-yi islām-i Muḥammadī の伝承。第一の伝承はユダヤ教徒の伝承である。彼らは『旧約聖書 *Tawrā*』に依拠して伝える。彼らはエジプトのスルターンたちの解放奴隷のトルコ人である。その一人が逃げだし、ホラーサーンに向かった。ヤズドに到着すると、住み着いた。インドに向かったが、ガズニーンに住み着いたアルプティキーンのように。アター ‘Aṭā もまた同様にヤズドにおける支配権を獲得した。アターベクたちと同時代のことだったので、彼の子孫もまたアターベクと名乗った。（*Majma'/1381*: 61）

校訂者のモハッデスは何の注記もせずに翻刻しているが、この箇所は明

らかに意味が通らない。前半部の主題は世界の諸民族の暦の話であるのに対し、下線を引いた後半部ではヤズドの地方政権の話に話題が急に変わっている。そこで写本の該当箇所を確認してみると（*Majma'*/909: 19b-20a, 画像４）、この引用箇所の前半部と後半部の間には、頁の切れ目があることが分かる。すなわち、この不自然な文章の原因は、19葉目と20葉目の間にあった頁が脱落したためである可能性が高い。この箇所をＣ372写本で確認してみると次のようになっている。

> 第一の伝承はユダヤ教徒の伝承である。彼らは『旧約聖書 *Tawrā*』に依拠して伝える。「アダムの時代から預言者の長ムハンマド生誕の時までは4340年である」と。第二の伝承はキリスト教徒の伝承である。彼らは『福音書 *Injīl*』を典拠に伝える。「アダムの時代から被造物の中で最も偉大で優れた御方ムハンマド生誕の時までは5972年である」と。第三の伝承はゾロアスター教徒の伝承である。彼らはペルシア人の書物に依拠して伝える。「ペルシア人の知識人の暦に拠れば、人類の父（アダム）の時代から世界における最良の人物（ムハンマド）の吉兆ある時代までは6172年である」と。（*Majma'*/*C372*: 17b, 画像２）

このように、イスタンブル写本では脱落している記事がＣ372写本には保存されている。Ｃ372写本では、この後「『系譜（集成）』の目次 Fihrist al-Ansāb」という題字が続き、その作品の内容が表形式の目次で紹介されている（*Majma'*/*C372*: 18a-24b）。その目次の文字は技巧が施された飾り文字になっており、歴史書の写本としては珍しい書き方になっている。そのために、イスタンブル写本からこの部分だけが切り取られてしまったのだろうか。Ｃ372写本の葉数で換算してみると、イスタンブル写本の脱落部分は実に7葉にも及ぶ。現行刊本が底本としたイスタンブル写本は、書写年代が新しいだけではなく、保存状態においてもＣ372写本には及ばないのである。一方、Ｃ372写本には目立った脱落は見られない。したがって、Ａ系統の『系譜集成』の現存最古かつ最良の写本はＣ372写本だと考えるべきであろう[27]。

現行刊本の問題はこれだけに留まらない。最大の問題は、校訂者のモハッデスが底本であるイスタンブル写本のテクストにすら忠実に従っていない、という点である。例えば、（*Majma‘/909*: 19b, 画像４）に見られる「『系譜集成』の始まり Āghāz-i Kitāb-i Majma‘ al-Ansāb」という題字は、現行刊本で言えば、61頁目の３行目に書かれるべきであるが（*Majma‘/1381*: 61）、この題字は見られない。この題字は、その代りに63頁目に挿入されている（*Majma‘/1381*: 63）。このように、モハッデスは時折、底本のテクストを何の断りもなく書き加えたり書き替えたりしている。したがって、正確に『系譜集成』という史料の内容を理解するためには、やはり写本を確認する必要があるのである。

５．Ａ系統写本の位置付け

以上、Ｃ372写本が『系譜集成』の現行刊本を正確に理解する上で必要不可欠な写本であることを明らかにしてきた。本稿を締めくくるにあたって、このＣ372写本が属するＡ系統の写本群が、「本当に」現存する最古の第２版『系譜集成』からの写しなのか、という点について検討したい。というのも、この写本群には様々な形で後世の加筆が確認できるからである。

Ａ系統の写本には、『系譜集成』の本文が完結した後[28]、ファルユーマディー Ghiyāth al-Dīn b. ‘Alī Nāyib Faryūmadī という人物の手になる『系譜集成続編 *Dhayl-i Majma‘ al-Ansāb*』が補われている。この『系譜集成続編』は736／1335/6年までの記事を含む『系譜集成』を補うために、ナジュム・アッディーン Khwāja Najm al-Dīn Khiḍr b. Khwāja Tāj al-Dīn Maḥmūd Ghāzī Bayhaqī というパトロンの命令により作成された増補で、759年ズー・アルヒッジャ月／1358年に至る事件を対象としている（*Majma‘/1363*: 339-349）。この著者とパトロンが何者であるのかは現時点では不明であるが、1335/6年、すなわちアブー・サイードが亡くなるまでの事件[29]を対象としていた『系譜集成』に、1358年以降、『系譜集成続編』が補われたことになる。

ところで、Ａ系統の写本には、『系譜集成続編』の冒頭とアブー・サ

イードの死亡記事の間に、少なくとも二度にわたって付け加えられた増補記事が確認できる（*Majmaʿ/1363*: 293-335）。最初の増補記事は、1336年に即位した傀儡君主ムハンマド・ハーン Muḥammad Khān（在位1336年）の治世に書かれたものである。シャバーンカーライーは彼に対し、その王権の永続を祈る祈願文を用い、1336年の事件を数多く収録している（*Majmaʿ/1363*: 305-306）。シャバーンカーライーは、『系譜集成』第２版の序文ではその名前に言及することなく[30]、パトロンである当代の君主に対する頌詩を詠んでいるが（*Majmaʿ/1381*: 18-19）、これは、このムハンマド・ハーンに献呈されたものだと考えられている[31]。シャバーンカーライーは、アブー・サイードに献呈するために『系譜集成』を完成させたが、献呈する前にアブー・サイードは亡くなり、作品も散逸してしまった。その後、彼は新しい君主への序文を補い（第２序文）、第２版を作成したが、この部分の増補はまさしくその時のものであろう（表１）。ただし既に述べたように、Ａ系統の写本には1337年12月16日に著者自身が書き上げたという記述がある。そのため、実際には、ムハンマド・ハーンの治世には完成しなかったという可能性も考えられる。

Ａ系統の写本にはこの後にも更に増補記事が続く。そこでは、イルハーン朝滅亡後の諸地方政権の動向が克明に伝えられている。その中でも、ムザッファル朝４代君主シャー・シュジャーゥ（在位1366-1384年）（*Majmaʿ/1363*: 318）、ジャラーイル朝３代君主フサイン（在位1374-1382年）（*Majmaʿ/1363*: 313）、シャー・ワリー Ghiyāth al-Dīn Shāh Walī（*Majmaʿ/1363*: 329）[32]に対し、その統治の永続を願う祈願文を用いている。この三人の中で、シャー・ワリーが最後に登場し、その治世を、美辞麗句をもって賞賛していることから、この増補はシャー・ワリーに対して献呈された可能性が高い。最後の記事の日付781年ラジャブ月８日／1379年10月20日（*Majmaʿ/1363*: 333）も、この三人の治世に一致する。この増補記事について、ジャァファリー・マズハブは『系譜集成続編』の一部が製本の際に誤ってその本文よりも前に挿入されてしまったと解釈しているが（Jaʿfarī Madhhab 1384: 253-254）、パトロンの名前も対象としている時代も異なるために、『系譜集成続編』よりも後世に加筆された別の増補記事だと考えるべきではなかろうか。シャバーンカーライー

1332/3年	初版	ギヤース・アッディーンに献呈、散逸
1336年	第２版	ムハンマド・ハーンに献呈
1358年以降	第３版	ファルユーマディーが『系譜集成続編』を増補、ナジュム・アッディーンに献呈
1379年以降	第４版	シャー・ワリーに献呈

表３．Ａ系統写本の成立過程

の生年は1293/4年であるため、著者自身による増補記事だという可能性も考えられる（表３）。

先行研究において最古の第２版だと考えられてきたＡ系統の写本には、それが完成した1336年以降の増補記事が数多く確認できる。それに加え、章構成自体も、著者が第２版の序文で提示したものとは異なっている。シャバーンカーライーは、『系譜集成』の２部４章１節をモンゴルの歴史に、２部４章２節をシャバーンカーラなどイランの地方政権の歴史にあてているが（*Majmaʿ*/C372: 23b-24b）、Ａ系統の写本では、１節と２節が逆に配置され、モンゴルの歴史で終わるという構成になっている（表２）。イランの地方政権の歴史をサッファール朝に始まるイランの諸王の歴史と続けて叙述するためなのか、それとも、増補記事執筆時の支配者であるイルハーン朝の後継政権の歴史をモンゴルの歴史と続けて叙述するためなのか、確かなことは分からない。ただ、第２版のテクストに手が加えられていることは間違いない。Ａ系統の写本は1379年頃に至るまで書き伝えられていく中で、多くの情報量を含むようになったのである(33)。もちろんこれらの情報には大きな価値が認められるが、これだけ手が加えられている以上、Ａ系統の写本群を現存する最古の版であるとする見解は見直す必要があるだろう。

６．結びにかえて

14世紀前半に編まれたペルシア語普遍史書『系譜集成』には最低でも25点の写本が残されており、その写本の系統は大きく分けて３つに分類できる。現行刊本はその中でも、後世に多くの情報が補われた最も分量の多い系統の写本に基づいて校訂されたものである。校訂者モハッデス

は、写本の校訂を行う際、十分な写本調査を行わず、現存最古にして最良のC 372写本を利用しなかった。彼が底本としたイスタンブル写本は書写年代や内容においてC 372写本に劣る写本であり、大きな頁の脱落すら見られる。それに加え、その校訂作業には幾つか問題点も見られ、現行刊本だけに頼っていては、『系譜集成』という史料の中身を正確に理解することは難しい。したがって、このC 372写本は『系譜集成』を史料として利用する際には必要不可欠な写本であると言えよう。本来、このC 372写本を利用するためには、サンクトペテルブルグを訪れなければならない。しかし幸いなことに、東洋文庫に所蔵されるマイクロフィルムコレクションのおかげで、日本にいながらにして、この貴重な写本を参照することができるのである(34)。

＊本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）、松下幸之助記念財団研究助成、平和中島財団日本人留学生奨学金による研究成果の一部である。

文献目録

史料

Majma'/1381: Shabānkāra'ī, *Majma' al-Ansāb*, ed. M. H. Muḥaddith, Vol. 1, Tehran, 1381.

Majma'/1363: Shabānkāra'ī, *Majma' al-Ansāb*, ed. M. H. Muḥaddith, Tehran, 1363.

Majma'/C 372: Shabānkāra'ī, *Majma' al-Ansāb*, St. Petersburg, Institute of Oriental Manuscripts, MS. C 372.

Majma'/909: Shabānkāra'ī, *Majma' al-Ansāb*, Istanbul, Süleymaniye Library, MS. Yeni Cami 909.

参考文献

Abdul Moid Khan, S. 1996: *A Descriptive Catalogue of the Persian Manuscripts*, Vol. 2, Tonk.

Afshār, Ī. & Dānish-pazhūh, M. T. 1344: *Nuskha-hā-yi Khaṭṭī*, Vol. 4,

Tehran.

——— 1364: *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Kitāb-khāna-yi Millī-yi Malik*, Vol. 4, Tehran.

Ali Khan, S. 1987: *A Descriptive Catalogue of the Persian Manuscripts*, Vol. 1, Tonk.

Anon. 1310: "Sulṭān Maḥmūd-i Ghaznawī wa Shu'arā az Kitāb-i Majma' al-Ansāb," *Majalla-yi Sharq*, 10, 622-623.

Āqā Buzurk al-Ṭihrānī n. d.: *al-Dharī'a ilā Taṣānīf al-Shī'a*, Vol. 20, Beirut.

Arberry, A. J. 1952: *A Second Supplementary Hand-List of the Muḥammadan Manuscripts in the University and Colleges of Cambridge*, Cambridge.

Āriyan-pūr, Y., Īzadī, S. & Kishāwarz, K. trs. 1362: *Adabīyāt-i Fārsī bar Mabnā-yi Tālīf-i Istūrī*, Vol. 2, Tehran.

Aubin, J. 1953: "Les princes d'Ormuz du XIIIe au XVe siècle," *Journal Asiatique*, 241, 77-137.

——— 1981: "Un chroniqueur méconnu, Šabānkāra'ī," *Studia Iranica*, 10, 213-224.

Bahār, M. T. 1386: *Sabk-shināsī*, Vol. 3, Tehran.

Barthold, W. 1992: *Turkestan down to the Mongol Invasion*, New Delhi.

Blochet, E. 1905: *Catalogue des manuscrits persans de la Bibliothèue Nationale*, Vol. 1, Paris.

Bosworth, C. E. 1963: "Early Sources for the History of the First Four Ghaznavid Sultans (977-1041)," *The Islamic Quarterly*, 7/1-2, 3-22.

Bosworth, C. E. & Jackson, P. 1997: "SHABĀNKĀRA'Ī," *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition, Vol. 9, 158b-159a.

Bregel, Yu. E. 1972: *Persidskaia Literatura*, Vol. 1, Moscow.

Browne, E. G. 1900: *A Hand-list of the Muḥammadan Manuscripts, Including All Those Written in the Arabic Character, Preserved in the Library of the University of Cambridge*, Cambridge.

——— 1951: *A Literary History of Persia*, Vol. 3, Cambridge.

Dānish-pazhūh, M. T. 1357: *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Kitāb-khāna-yi Markazī wa Markaz-i Asnād-i Dānish-gāh-i Tihrān*, Vol. 16, Tehran.

Ethé, H. 1889: *Catalogue of Persian, Turkish, Hindûstânî, and Pushtû Manuscripts in the Bodleian Library*, Vol. 1, Oxford.

——— 1903: *Catalogue of Persian Manuscripts in the Library of India Office*, Vol. 1, Oxford.

Ivanow, W. 1985: *Concise Descriptive Catalogue of the Persian Manuscripts in the Collection of the Asiatic Society of Bengal*, Calcutta.

Ja'farī Madhhab, M. 1384: "Dhayl-i Majma' al-Ansāb-i Shabānkāra'ī," *Āyīna-yi Mīrāth*, 30-31, 249-255.

Kerney, M. ed. 1898: *Bibliotheca Lindesiana: Hand-list of Oriental Manuscripts*, Aberdeen.

Khwāja Pīrī, M. 1996: *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Fārsī-yi Kitāb-khāna-yi Raḍā-Rāmpūr*, Vol. 1, Rampur.

Melville, Ch. 2001: "From Adam to Abaqa: Qāḍī Baiḍāwī's Rearrangement of History," *Studia Iranica*, 30, 67-86.

Merçil, E. 1975: "Sebüktegin'in Pendnâmesi," *İslâm Tetkikleri Enstitüsü Dergisi*, 6/1-2, 203-233.

Miklukho-Maklai, N. D. 1975: *Opisanie Persidskikh i Tadzhikskikh Rukopisei Instituta Vostokovedeniia*, Moscow.

Mirzoev, A. M. & Boldyrev, A. N. 1960: *Katalog Vostochnykh Rukopisei Akademii Nauk Tadzhikskoi SSR*, Vol. 1, Stalingrad.

Morley, W. H. 1854: *A Descriptive Catalogue of the Historical Manuscripts in the Arabic and Persian Languages, Preserved in the Library of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, London.

Muginov, A. M. 1954: "Istoricheskii Trud Mukhammeda Shebāngā ra'ī," *Uchenye Zapiski Instituta Vostokovedeniia*, 9, 220-240.

Muḥaddith, M. H. 1363: "Pīsh-guftār," in Muḥammad b. 'Alī b. Muḥammad Shabānkāra'ī, *Majma' al-Ansāb*, ed. M. H. Muḥaddith, Tehran.

——— 1381: "Pīsh-guftār," in Muḥammad b. 'Alī b. Muḥammad Shabānkāra'ī, *Majma' al-Ansāb*, ed. M. H. Muḥaddith, Vol. 1, Tehran.

Munzawī, A. n.d.: *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Fārsī*, Vol. 6, Tehran.

Nafīsī, S. 1363: *Tārīkh-i Naẓm wa Nathr dar Īrān wa dar Zabān-i Fārsī*, Vol. 1,

Tehran.

Nawshāhī, ‘Ā. 1983: *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Fārsī-yi Mūza-yi Millī-yi Pākistān-Karāchī*, Islamabad.

Naẓīm, M. 1933: “The Pand-Nāmah of Subuktigīn,” *Journal of the Royal Asiatic Society*, 605-628.

——— 1971: *The Life and Times of Sulṭān Maḥmūd of Ghazna*, New Delhi.

Rieu, Ch. 1879: *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, Vol. 1, London.

——— 1883: *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, Vol. 3, London.

Ṣadrā’ī Khu’ī, ‘A. 1377: *Fihrist-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭī-yi Kitāb-khāna-yi Majlis-i Shūrā-yi Islāmī*, Vol. 38, Qom.

Ṣafā, Dh. 1372: *Tārīkh-i Adabīyāt dar Īrān*, Vol. 3/2, Tehran.

Salemann, C. 1894: “Das Asiatische Museum im Jare 1890: Nebst Nachträgen,” *Melanges Asiatiques*, 10, 271-292.

Sayyid Yūnasī, M. W. 1348-1354: *Fihrist-i Kitāb-khāna-yi Millī-yi Tabrīz*, 3 vols., Tabriz.

Storey, C. A. 1989: *Persian Literature: A Bio-bibliographical Survey*, Vol. 1, London.

Tauer, F. 1931: “Les manuscrits persans historiques des bibliothèques de Stamboul I,” *Archiv Orientální*, 3, 87-118.

佐藤次高　1998：「サンクト・ペテルブルグ東洋学研究所所蔵内陸アジア出土文書のマイクロフィルム化とその整理について」『東洋学報』79/4。

——— 2001：「サンクト・ペテルブルグ東洋学研究所所蔵内陸アジア出土文書のマイクロフィルム化とその整理について（続報）」『東洋学報』83/1、31。

東洋文庫　n.d.：『東洋文庫収集サンクトペテルブルグ所蔵敦煌等文献マイクロフィルム仮目録 9 （ペルシア語）』。

本田實信　1984：「イラン」『アジア歴史研究入門 4　内陸アジア・西アジア』同朋舎、593-662。

注

（1） Institute of Oriental Manuscripts, Russian Academy of Sciences、住所：191186 Russia, St. Petersburg, Dvortsovaya emb., 18、電話：＋7（812）315-87-28、ホームページ：http://www.orientalstudies.ru/。

（2） 東洋写本研究所からのマイクロフィルム購入の経緯については（佐藤1998；佐藤2001）を参照せよ。写本選定の経緯については、http://www.l.u-tokyo.ac.jp/IAS/6-han/97-98/6houkoku/kondohoukoku.html（2013年12月14日最終閲覧）が詳しい。

（3） C 372写本は東洋文庫所蔵マイクロフィルムR 311に含まれている（東洋文庫 n.d.: 47-48）。

（4） 管見の限り、『系譜集成』の詳しい書誌情報を最初に提示したのは（Morley 1854: 28-30）。その中でも、『系譜集成』は「何の価値もない」歴史書だと評価されている。

（5） ただし、ペルシア文学の概説においては、イルハーン朝時代を代表する歴史書の一つとして、その書名はしばしば紹介されてきた。例えば（Nafīsī 1363: 182-183; Ṣafā 1372: 1269-70; Bahār 1386: 177）。

（6） 刊本では（*Majmaʿ/1363*: 36-41）に相当する部分。また、ガズナ朝史に関しては（Anon. 1310）という『系譜集成』の記述の一部を紹介した論文もある。

（7） ナズィームが底本としたのはパリ写本（Paris, National Library, MS. Suppl. persan 1278）。この情報の有用性については、ナズィーム以外にも、ボズワース C. E. Bosworth が指摘している（Naẓīm 1971: 11; Bosworth 1963: 18-20; Bosworth & Jackson 1997: 158b）。

（8） メルチルはイスタンブル写本（Istanbul, Süleymaniye Library, MS. Yeni Cami 909）を底本としている。

（9） 刊本では（*Majmaʿ/1363*: 217-219）に相当する部分。

（10） オバンが利用したのは、ロンドン写本（London, British Library, MS. Add. 16696）、サイード・ナフィースィー旧蔵写本（現在テヘラン大学所蔵 Tehran, University Library, MS. 5838）、パリ写本（Paris, National Library, MS. Suppl. persan 1278）、ソルターノル・コッラーイー旧蔵写本、の4写本。

(11) このような書名を持つ史料を筆者は知らない。『集史 *Jāmiʿ al-Tawārīkh*』第１巻「モンゴル史」のことであろうか？

(12) 前半部の校訂本（*Majmaʿ/1381*）でもこれら５つの写本が参照されている（Muḥaddith 1381: 11-12）。

(13) 初刊が1927-1939年である（Storey 1989）のロシア語訳補訂版。『系譜集成』の項目にも多くの情報が追加されている。

(14) ブレーゲルの文献目録に紹介されている『系譜集成』の写本の数を数えたメルヴィル Ch. Melville はその総数を13点としたが（Melville 2001: 73)、筆者が数え直したところ、実際には16点の情報が書かれている。

(15) ５つの写本のうち、イスタンブル写本、ロンドン写本、パリ写本の影印本はテヘラン大学附属中央図書館に所蔵されており、モハッデスはそれらを利用している（Muḥaddith 1363: 13-15）。

(16) 写本の詳細に関する情報は、「所蔵場所」、「所蔵番号」、「典拠」、「書写年」、「紙の幅」、「書写面の幅」、「行数」、「葉数」、「写字生の名前」、「その他」の順番に示してある（「紙の幅」以降の情報の中で不明なものがある場合には、特に注記せずに省略した)。また、ブレーゲルが紹介していない写本については、＊印をつけて明示した。これらの情報は、基本的に各図書館の写本目録に基づいているが、筆者の写本調査により幾つか付け加えた（あるいは訂正した）情報もある。それらの情報については、太文字で強調してある。

(17) 特に６番目のドシャンベ写本には欠葉と頁の混乱が多く、写本系統の判断が難しい。ただし少なくとも、記述の分量・内容からＣ系統写本ではないことは確かである。本稿では、Ａ系統写本に特有の『系譜集成続編』が残っていないことから、便宜的にＢ系統写本に分類したが、この写本については慎重に検討する必要がある。

(18) ソルターノル・コッラーイー旧蔵写本については目録が刊行されておらず、写本番号は不明。本稿では、便宜的に（Munzawī n.d.: 4189-90）で割り当てられている番号を使用した。

(19) この写本の存在については、アーガー・ボゾルグ・テヘラーニー Āqā Buzurg Ṭihrānī も言及している（Āqā Buzurk al-Ṭihrānī　n. d.: 19)。ナフチェヴァーニー Ḫ. Nakhjiwānī 旧蔵写本の多くはタブリーズ国立

図書館 Kitāb-khāna-yi Millī-yi Tabrīz に寄贈されたが、『系譜集成』の写本は同図書館の目録では確認できない（Sayyid Yūnasī 1348-1354）。

(20) カラチ写本の情報の一部は、小林理修氏の調査に基づくものである。情報を提供して頂いた氏に記して謝意を表する。

(21) 例えば（Barthold 1992: 46）。

(22) ただし、Muḥammad b. ʻAlī b. al-Shaykh と名前の形が不完全である点、この名前の部分だけ行の外にはみ出して書かれている点には注意しなければならない。

(23) 少し手前の本文中にはこれ以前の日付（738年第 1 ラビー月／1337年）が見られ、著者の筆の進み具合が確認できる（*Majmaʻ*/C372: 193a）。

(24) C 372写本における訂正線はこの箇所だけだが、欄外には多くの書き込みが見られる（書き込みは、特に98b～108b葉に集中している）。

(25) 後述するように、C 372写本には1379年の増補記事までが含まれており、少なくとも書写年代が1337年でないことだけは確かである。しかし、この増補記事をシャバーンカーライー本人が書いたのか、それとも写字生が書写する時に書き加えたものなのか、判断するのは難しい。

(26) シャバーンカーライーは『系譜集成』の第 2 版を作成する際に、もともとあった序文の前に新しく序文を補っている。そのため、『系譜集成』の多くの写本には 2 つの序文が見られる。

(27) 筆者が確認した写本の中では、ここで扱った 2 写本以外にも 2 つの写本がA系統写本に分類できる。その中でも、サンクトペテルブルグ写本（St. Petersburg, Institute of Oriental Manuscripts, MS. C1096）はC 372写本から書写されたもので、イスタンブル写本よりも良写本である可能性が高い。最後のテヘラン写本（Tehran, Majles Library, MS. 14325）は他の 3 つの写本よりも書写年代が新しく、最終葉が脱落している。

(28) 『系譜集成』の末尾には「作品の最後 khātim al-kitāb」と記されている（*Majmaʻ*/*1363*: 335）。

(29) 『系譜集成』では、アブー・サイードの死は736年第 2 ラビー月13日／1336年 1 月28日だと伝えられている（*Majmaʻ*/*1363*: 290）。

(30) C 372写本の序文においても、献呈先である君主の名前は空白になっている（*Majmaʻ*/*C372*: 3a）。シャバーンカーライー自身が空白のままにし

ておいたのか、それとも、書写の過程で空白にされたのかは分からない。

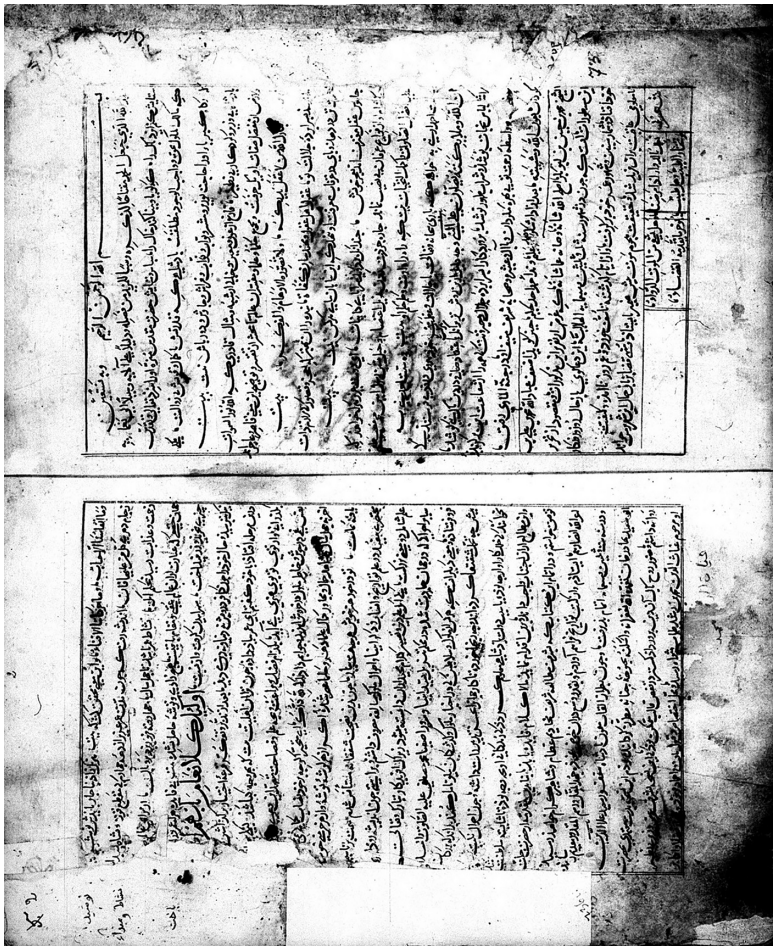
(31) ジャァファリー・マズハブ M. Ja‘farī Madhhab も、ムハンマド・ハーンと彼の宰相ザカリヤー・アブド・アッラフマーン Zakariyā ‘Abd al-Raḥmān の名の下に執筆した、と考えている（Ja‘farī Madhhab 1384: 249）。

(32) アミール・シャイフ・アリー・ヒンドゥー・ヌーヤーン Amīr Shaykh ‘Alī Hindū Nūyān の息子。

(33) 『系譜集成』のA系統、B系統、C系統の写本の内容と情報量には、同じ作品から派生した写本とは思えないほど、大きな差異が見られる。それぞれの写本群には独自の特徴が見られるため、将来的には3つの写本群についてそれぞれ別の校訂本を作成する必要があるだろう。

(34) 現行刊本とC372写本の章構成とそれに対応する頁数については、（表2）に示してある。

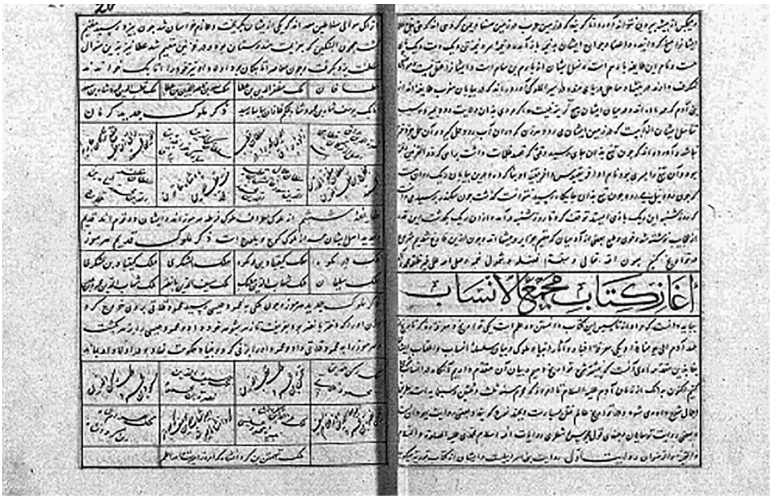
（日本学術振興会特別研究員）



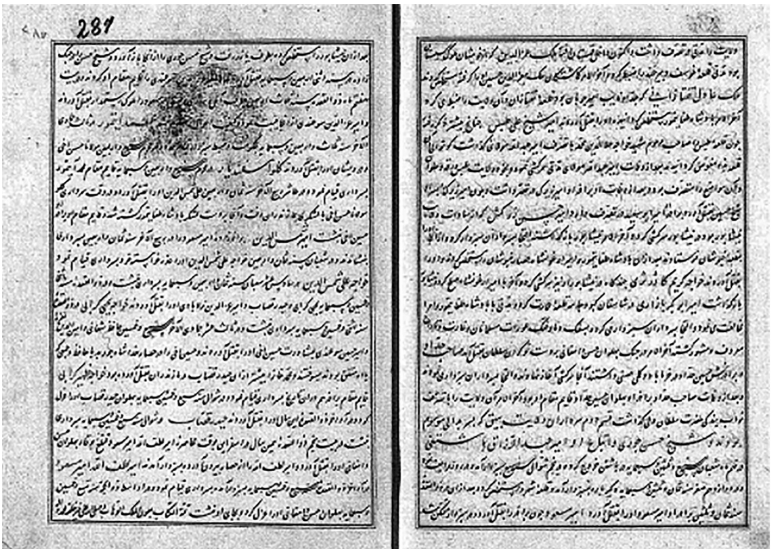
画像１ 『系譜集成』サンクトペテルブルグ写本Ｃ372・巻頭
（St. Petersburg, Institute of Oriental Manuscripts, MS. C372, 1b-2a〈東洋文庫〉）

画像 2 『系譜集成』サンクトペテルブルグ写本C 372・本文冒頭
（St. Petersburg, Institute of Oriental Manuscripts, MS. C372, 17b-18a〈東洋文庫〉）

画像 3 『系譜集成』サンクトペテルブルグ写本C 372・最終葉
（St. Petersburg, Institute of Oriental Manuscripts, MS. C372, 249b〈東洋文庫〉）



画像 4 『系譜集成』イスタンブル写本・本文冒頭
(Istanbul, Süleymaniye Library, MS. Yeni Cami 919, 19b-20a © Süleymaniye Kütüphanesi)



画像 5 『系譜集成』イスタンブル写本・最終葉
(Istanbul, Süleymaniye Library, MS. Yeni Cami 919, 286b-287a © Süleymaniye Kütüphanesi)